

よって、前の2話は、TDL児童誘拐未遂の噂を人々の間にスムーズに受け入れさせる精神的土壌を作った可能性はあるが、その直接のルーツになったとは考えにくい。インターネットなどにより、噂の収集を進めていくと、アメリカのディズニーランド（DL）に、まったく同様の噂が伝わっていることが分かった。また、アメリカには古くか

ら、「トイレからの誘拐」をテーマにした噂があり、これが5年周期で発生を繰り返しているという。以上から、TDL児童誘拐未遂の噂の正体は、アメリカで語られてきた伝統的な噂のバリエーションとして、DLの児童誘拐未遂の噂が発生し、それが日本に持ち込まれ、TDLを舞台とした新しい噂として広まっていった、と考えられる。

親の自由選択による子供の生活空間の拡充 ——練馬区における保育所・学童の利用——

増山 絢

保育現場において、「多様さ」そして「少子化」がキーワードとなっている。子どもの数は減少傾向にあるのに対して、保育ニーズは各家庭の状況によって異なり、要求も様々なのである。

その要因としては、家族形態の変化・核家族化に始まり、さらに女性(母親)の就労率の高まりにより保育機関への依存度が強まっているからだといえる。当然、多くの問題を保護者また保育関係者が抱えている。具体的には、保育時間・保育従事者数・保育内容、また就学後の保育(本研究では学童保育を取り上げた)に関してのものであり、必ずしも保護者の要求と保育者の保育観とが一致しない場合に問題はますます複雑化する。

今回の研究において「親の自由選択」とは母親による保育所入所の決定をさす。97年に改正された児童福祉法によって、より広域での保育所入所が可能となった。現段階では、この自由

選択の権利まで保護者・保育所とも認識が高まっていないと思われたが、今後の動向を見守る必要がある。また「子ども」とは就学前後の保育所入所児とした。「生活空間」とは居住地域(家・公園等の遊びの空間)と補足的空間(各保育機関)、また学童保育との関連を調べた。特に就学直後の放課後保育空間が現在、学童保育にかぎられている点に注目し、その現状と問題点について考察した。

全体を通して明らかにしたかったのは、子どもがどこで育つかである。誰の手によって、誰と共に育って行くのかは子どもの精神的・身体的成長に大きく影響すると思われる。今後の課題として、日常生活における子どもの移動や他人との接触機会の必要性などの長期的観察が挙げられる。また青少年犯罪の急増が危惧される中で、成長段階の早期から子どもに着目することが必要となってきたといえる。

バス交通の利便性の検証 ——与野市を事例として——

青木 理 恵

本研究は、住みやすさの指標の一つとして「バス交通の利便性」を取り上げ、東京から30 km圏に位置し、人口約8万人、面積約8.3 km²のいわゆるベッドタウン与野市について分析したものであ

る。

近年、日本のバス輸送は衰退の一途を辿っているが、与野市においても例外でなく、バス離れが起きている。その原因は、「走行環境の悪化